学生の声

「違い」

工学研究科　電子工学専攻　藤田研究室　博士後期課程３年　西　中　浩　之

博士後期課程まで進むと、同じ博士後期課程の学生は様々なバックグラウンドを持つ人が増えてきます。もちろん電気系からそのまま進学する人もいれば、一度社会人となり、戻ってきた人、他大学から来た人、留学生など多彩なバックグラウンドを持っています。私もそのうちの一人で、他専攻から電子工学専攻に進学してきました。異なるバックグラウンドを持つというのは、非常に面白くて、いろいろな経験をすることが出来ます。これは研究や教育の場だけではなく、普段の場からも感じられます。前に所属していた専攻は化学工学といって、化学プラントの設計などについて指導を受けたり、研究を行ったりしていました。その為、先生方とお酒を飲む場などでは、アルコールの度数について、発酵による限界やエタノールの蒸留の最大度数の話をしたりしています。このあたりは微妙に授業と関連していて、なかなか面白いものです。一方で、電子専攻に所属してから初めてそのような場に参加したとき、アースの取り方やその重要性について話しているのを聞くと、全く知らないことであったので頭の中はクエスチョンマークでいっぱいでした。ただ、バックグラウンドが違うだけで、こういう違いが現れてくるのかと、話を聞いていながら新鮮で面白い体験ができたと思います。

研究の場では、異なる所属から来た人も今いる専攻に染まりがちになってしまうために、その異なるバックグラウンドというものが目に見えて現れることが少なくなってしまいます。しかし、実際は大学や研究機関などで受けた教育の中には、思考の中にその専門独自の傾向的な方向性というものが身につくようになっていると感じています。このような異なるバックグラウンドから得られる異なる思考の方向性や知識から生まれる結果は、同様のバックグラウンドを持つ人からはなかなか生まれにくいものであると思います。その専攻に所属するからには、その専攻の考え方に染まりがちになってしまうのはなくてはならないものですが、同じ知識を共有する教育だけでなく、このような違う知識を活かす教育があると、違うバックグラウンドを持つ学生だけでなく、それ以外の学生も貴重な経験を得るのではないかと思います。

「ねえさん」と呼ばれて―女性研究者支援について思うこと―

工学研究科　電子工学専攻　野田研究室　博士後期課程１年　北　村　恭　子

「ねえさん」これが野田研究室でのあだ名である。そもそも卒業した先輩が「姉さん」と呼び始めてから、気がつけば「『ねえさん』の『ねえ』の字は女辺に且つと書いて『姐さん』です！！」と満面の笑みで語る後輩が出てくるまでに定着した。一見、女性に対して年増に感じさせる失礼なあだ名だが、私はこのあだ名を誇りに思っている。

我が国における女性研究者の割合は12.4％と欧米の国々と比べても低い。特に、工学分野では7.0％と非常に少ない。まだまだ研究者という職業が男性社会とも言える状況下で、近年では「女性研究者支援」が国を挙げて実施されている。私はまだ家庭も子どもも持たないので、実感は薄いが、出産・育児の支援体制が整うことは心強いし、何よりそれらへの男性の関心も高まることは重要と考える。一方で、女性研究者になるかどうかの過程にある女子学生への支援はまだまだ難しいと感じている。それは、男性が大半を占める研究室での女子学生の居場所作りが難しいからである。

女子学生の研究室での過ごし方にはおおよそ３通りあるように思う。①女子学生のみとあるいは一人で過ごす。②完全に男性と同化する。③女性として男性に混じり過ごす。私の経験から判断すると、①の過ごし方の出来る女子学生は、実は最も心根が強い。しかし、男性社会を窮屈に感じて研究者になることを選ばない場合が多い。そのため、工学系で女性研究者になろうとする女子学生の多くは②か③に当てはまる。②の過ごし方の出来る女性は限られてはいるが一度そうなると楽らしい。一方で、③の過ごし方が一番難しい。「女性」と意識されすぎて、できすぎることを「女のくせに」と中傷され、博士課程への進学を諦めてしまった先輩がいる。逆に「女性」と意識されなさ過ぎて、いくつかの体力的な問題に直面し、月経前症候群（PMS）や憂鬱などの精神的な症状を訴えている友人も多い。女性であることは男性と同じ様にその人のアイデンティティの一つであるから、本来は、③の形で過ごせることが最も自然なはずである。③の形で女性が研究室を自分の居場所にすることが難しく無い研究室作りの支援はできないものかと考えている。

今日も「ねえさん」と呼ばれる。「ねえさん」というあだ名は、私が「女性」として研究室の中に溶け込んでいる証拠だと思っている。私は研究室で「女性」として過ごしている。この環境が心地よく、研究室の皆に感謝する日々である。